

発刊の辞

池田大作

この度、「ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵梵文法華經写本（SI P/5 他）—写真版」が、創価学会「法華經写本シリーズ」13として、上梓・発刊の運びとなりました。その実現に際し、イリーナ・ポボワ所長、マルガリータ・ヴォロビヨヴァ博士、同研究所の諸氏には格別のご配慮を賜り、心から御礼申し上げます。

また、SI P/5（通称「ペトロフスキー本」、「カシュガル本」）現在の管理番号はSI 1925/1927）の奥書に関する、大碩学ならではの優れた序論を執筆されたドイツ・フライブルク大学名誉教授オスカル・フォン・ヒニューバー博士に、最大に感謝申し上げます。

これまで同アカデミーより1977年、ペトロフスキー本の「授記品」冒頭の2葉の写真版の複製を、1995年には、「寿量品」と「化城喻品」の2葉の複製、さらに、サンクトペテルブルクで発刊された、初の梵文法華經校訂本（Bibliotheca Buddhica 10: *Saddharmapundarika*, 通称「ケルン・南條本」1908-1912）の第4分冊をご寄贈いただきました。いずれも人類の至宝として、大切に保管させていただいております。

私がサンクトペテルブルクを初めて訪問したのは、この美しい古都がレニングラードと呼ばれていた東西冷戦渦中の1974年9月13日のことでした。ピョートル大帝時代の壮大な歴史とロマンを偲ばせるネヴァ川河畔の美しい街並は、鮮烈な光彩を放ち、今も私の心に深く焼き付いています。

第2次世界大戦中、ナチス・ドイツ軍はレニングラードを900日間にわたって包囲し、食料・燃料の補給路を遮断しました。激しい砲爆撃、飢餓と厳寒によって、犠牲者は100万人にも及んだといわれております。この当時の研究所の歴史をヴォロビヨヴァ博士は、1996年2月に私と懇談した折、次のように証

言されていました。「包囲されていた900日の間、2人の男女が、わが研究所の写本類を守ることに全力をあげていました。地下室にあった文書が破損しないように、時々、箱を開けて風を通したりして懸命に保護しました。法華經の写本が現存するのは、この2人と、その他のスタッフのおかげなのです」と。

1996年11月29日、ユーリー・ペトロシヤン所長（当時、1930-2011）が来日され、その際、「法華經展をぜひとも、東京で開催してください。今日まで諸先輩が命がけで守ってきた法華經の貴重な写本です」、「法華經の精神を日常生活のなかで実践している創価学会の皆さまに、そして日本の多くの方々に見ていただきたいのです」との申し出をいただきました。それが契機となり、同研究所（当時はロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク支部）と東洋哲学研究所共催による「法華經とシルクロード」展の開催が決定される運びとなりました。

その後、2年間の準備期間を経て、1998年11月に東京展が実現し、膨大なコレクションから厳選された、法華經をはじめとする貴重な仏典の写本、木版本など、47点が日本で初めて公開されたのです。

開幕式で、法華經写本研究の世界的権威であった戸田宏文博士（1936-2003）は、念願であったペトロフスキー本の実物を目の当たりにして、「『生きていてよかった！』——それが、世界の学者の垂涎の的であったペトロフスキー本を見ての私の率直な感想です。90年もの間、門外不出であったものを、ロシア科学アカデミー東洋学研究所が国外に出品してくれたことに驚いています」と語っておられたと聞き及びました。

私も、開幕式の前日、来日されたエヴゲーニー・クチャーノフ所長（当時）、ペトロシヤン元所長（当時）、ヴォロビヨヴァ博士と共に、ペトロフスキー本をはじめとする人類の文化遺産を拝見しました。1000年の時を超え、ナチスの砲爆撃にも生き延びた歴史と、先生方の信義を重んじる行動に思いを馳せ、深い感動に包まれ、「またとない“無二の宝”を、よくぞ貸し出してくださいました」と心より御礼申し上げたことが懐かしく思い出されます。

同展は、オーストリア、ドイツでも開催され、大きな反響をよびました。その後、「法華經——平和と共生のメッセージ」展と銘打ち、新たな展示会が香港を皮切りに、マカオ、インド、スペイン、ネパール、ブラジル、スリランカ、イギリス、日本、台湾の10カ国・地域の都市を巡回しております。

この度、「ケルン・南條本」の校訂にも使用され、高い学術的価値を有するペトロフスキー本が、オリジナルに比べても遜色の無い鮮明なカラーの写真版として発刊されることは慶賀に堪えません。これにより、法華経研究がさらに進展することを心から念願するものです。

(いけだ だいさく／創価学会インタナショナル会長・東洋哲学研究所創立者)